

# L. L. ジェーンズ大尉と熊本洋學校

## — 教師館までのルート及び熊本洋學校再考 —

石 井 容 子

### 1. はじめに

「太政類典第二編」(自明治4年8月至明治10年12月)によると、文部省は、明治4年8月28日から7年10月7日までの3年間、アメリカ国籍のジェーンズ大尉(Leroy Lansing Janes、1837年3月27日-1909年3月27日)を英語学教師として雇用した。<sup>1</sup> ジェーンズは、赴任先の熊本洋學校で、英語による普通教育を行った。3年の任期が切れた後も、細川護久侯の援助で2年延長されて<sup>2</sup>都合5年間、熊本洋學校に奉職した。離熊後、大阪英語學校で勤務したあと、家族とともに帰国した。明治26(1893)年、3人目の妻フローラと再び来日し、第三高等中学校の英語教師となったが、教育制度改革により改称された第三高等学校を解雇され、鹿児島に赴任した。その後、第三高等学校に復職するが、明治32(1899)年、任期切れで離職し、帰国した。日本での教職を希望したが叶わず、晩年の10年間はカリフォルニアで過ごした。<sup>3</sup>

ジェーンズは、カリフォルニアで、彼自身のメモや熊本洋學校元生徒から送られた資料などに基づいて、30年前に5年間過ごした熊本での日常を綴った。その著作が、*KUMAMOTO, An Episode in Japan's Break from Feudalism*<sup>4</sup>「クマモト、日本の封建制からの幕開けに関するエピソード」(以下、「クマモト」とする。)である。

ジェーンズと熊本洋學校に関して、今まで様々な研究がなされているが、その多くは少数特定の研究者の論考を引用、活用するにとどまっている感がある。そこで、原点に戻って、地元熊本に残る資料等を論拠としながら、140年足らず前に創設された熊本洋學校を再考してきたが、その過程で、疑問点と言及したい点が出てきた。

本稿では、ジェーンズが初めて来熊した際の足取りに関する解釈について論じるほか、洋學校の設立の経緯とその波紋、洋學校での教育に関しては日課、開校時の授業の様子及びアルファベットの学習期間に絞って述べ、最後に、洋學校の閉校の理由について言及する。

### 2. 教師館までのルート

本項では、ジェーンズが来熊した経緯を踏まえたうえで、これまで明確にされてこなかったように思われる熊本入港から教師館までの経路について論じる。

ジェーンズが米国で軍役を退き新しい生活を始めた1868年、日本では徳川将軍家のもとで250年以上続いた封建的統治が幕を閉じ、重大な局面を迎えていた。1871年初め、熊本が外国人教師を求人しているという情報が、洋學校設立に尽力した横井大平の長崎留学時代の恩師で大学南校教師、宣教師のグイド・フルベッキ Guido Verbeck からニューヨークのオランダ改革派教会理事会に伝わり、

ジェーンズの義父スカッター牧師 Henry Martyn Scudder を経由してジェーンズのもとに届いた。ジェーンズは、速く離れた未知の国に、病気がちの妻、まだ3歳の誕生日を迎えていない長女、4月に生まれたばかりの息子連れていくべきかどうか数ヶ月思案した。しかし、彼の家族に対する責任が日増しに大きくなったことと、確実な月給400円が得られ3年間でかなりの貯金ができるという見通しが遠い外国の仕事という危険を上回って、結局ジェーンズは熊本に行く決心をしたのである。<sup>5</sup>

ジェーンズ一行は、サンフランシスコからおよそ21日の船旅の後<sup>6</sup>、横濱に到着した。そこで熊本の役人と3年の雇用契約を結び、熊本に向かった。<sup>7</sup> 瀬戸内海を抜け、パッペンベルグ島（高銚島）<sup>8</sup> を通り過ぎて長崎に到着すると、長崎で一時的待機した。潮流を利用して小型船で長崎から一気に島原湾を渡って肥後に到達するためであった。<sup>9</sup>

一方、熊本縣は、学生の選抜試験を終え、あとは外国人教師の到着を待つばかりであった。ジェーンズ一家は、横濱に入港する時と、長崎から肥後に向かう船中で、2度、台風に遭遇した。熊本に到達すると、通常は河口で投錨し、次の満潮を待って川を遡り小島に上陸する。しかし、役人の代表が夜明けとともに現地に駆け付けて投錨している小型船に川舟を送り込み、ジェーンズと家族を小島に上陸させている<sup>10</sup> ところをみると、来熊の予定が大幅に遅れたこと以上に、彼らが台風に遭遇した一家をどれ程案じていたかが窺える。

ジェーンズ一行は Serikawa 沿いの道を移動した。そして、小島上陸後の教師館までのルートにおける Serikawa に関して、先行文献では Serikawa を「白川」と解釈している。<sup>11</sup>

この Serikawa について、ジェーンズの妻ハリエットは、祖國に出した書簡で以下のように述べている。

Kumamoto is about four miles above Oshima right up the bank of the Serikawa. ...

The country was beautiful. Our path ran along the river bank through fields of waving rice and millet and past the neatest market gardens of sweet potatoes and radishes, egg plant and turnips.<sup>12</sup>

(Fig. 1) 熊本市を流れる3つの川の現在のルート

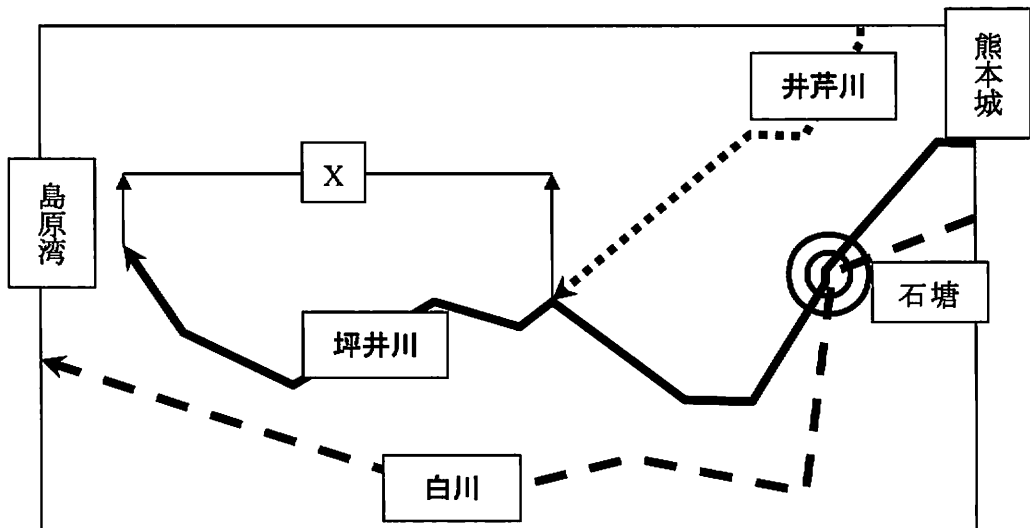
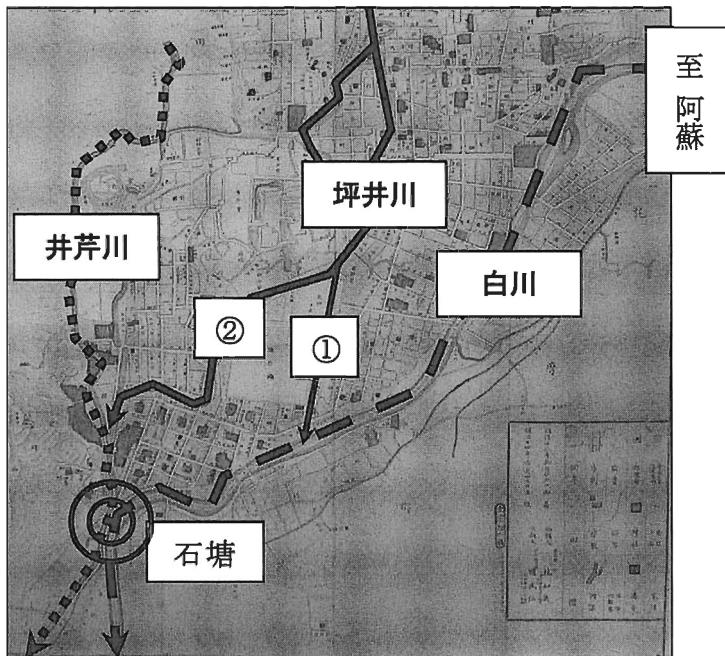


Fig. 1の通り、現在の地勢では、白川は、阿蘇から坪井川の南手を通り海に入るルート（Fig. 1の←■—）、坪井川は、熊本市北部の源を発して、高橋町で井芹川を受け入れ島原湾に注ぐまでのルート（Fig. 1の←■—）、井芹川は、熊本市と鹿本郡植木町の境あたりを水源として、高橋町で坪井川に合流するまでのルート（Fig. 1の◀■■■）を流れていて、現在、Fig. 1のXの流域は「坪井川」となっている。

この地勢において、乳飲み子と幼児を連れたジェーンズ一行は、時間のかかる白川沿いの道ではなく、それ以外のもっと短いルート、例えば、百貫往還などの整っていた現・坪井川沿いのルートをなぜ使わなかったかという疑問を筆者は今まで解決できないままだった。

慶長6年から12年にかけての加藤清正の画期的な大工事で、「千葉城以南の坪井川筋を廃川として（-①）新しく城の南面に沿うた新川を掘り（-②）、現鹿児島本線北岡鉄橋のところで井芹川を合流させ」<sup>13</sup>た。つまり、「白川に合流していた坪井川を付け替えて茶臼山の西を流れる井芹川に合流させて内堀とし、白川を外堀として城郭との間に城下町を配置した」<sup>14</sup>あと、天保年間に、「坪井川の末、白川に入り来りし所ふさぎ、唐人町の裏を掘り通し、三町目の橋に至り、それより下、井芹川に会し」<sup>15</sup>たのである。また、清正は、城下町を洪水から守るため、井芹川を高橋方面に向ける治水事業を行う中で、春日付近で合流していた白川と井芹川を分離し、「石塘イドモ」（Fig. 2の「◎」）という堤を築いた。整理すると、ジェーンズが熊本にやって来た頃、坪井川は、井芹川と合流するルート②までしか流れておらず、その後、昭和の初めに坪井川は大改修されて、現在の川筋となったことが分かった。

（Fig. 2）明治期、熊本市内を流れていた川のルート



元地図：熊本全圖（明治13年御届、明治14年出版）（一部を使用）  
熊本県立図書館所蔵

Fig. 1のXは、以前から坪井川と呼ばれていたのだろうか？

その前に考慮しなければならない事項がある。ジェーンズが来熊して1年足らず後に、明治天皇が九州に巡幸されたことである。

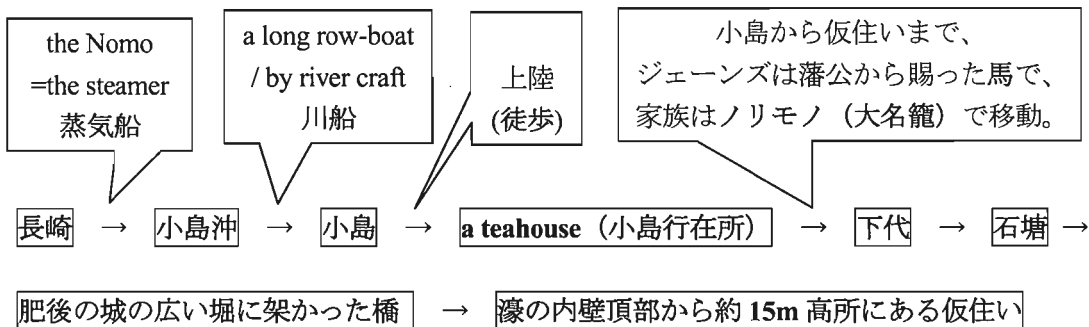
明治五年六月十七日（太陽暦で七月二十二日）…野母崎を経て天草灘に入り、午後三時早崎海峡を通過し、湯島の北方に沿ひて進ませらる、七時四十分肥後國小島沖に投錨す、白川縣權參事奉迎し天機を俟す、直ちに汽艇野母丸に乗御、坪井側の河口にてさらに端艇に移御し、流を廻りたまふ、…九時下松尾村字渦に著御、…九時三十分牙にて小島に著し、行在所（※米村基三郎の家）に入りたまふ、…

十八日 午前六時騎馬にて小島を發したまふ、…下代村を経て高橋町民が坪井川に架したる新橋を渡御し、熊本に向はせらる、…九時熊本に著し行在所（學舎、會輔堂と稱す）に入りたまふ、…<sup>16</sup>

当時、受け入れ府県にとって、天皇巡幸は一大事であったことだろう。ジェーンズが来熊した際は、藩公から賜った馬で小島から熊本に移動しているが、翌年、明治天皇も騎馬で小島から熊本に移動している。そして、所謂明治維新に遅れること3年の「肥後の維新」<sup>17</sup>以降、ジェーンズ招聘時も、天皇巡幸の折も、同じ実学党が県政を指揮していたことを考えると、明治天皇が熊本城下へ巡幸されるルートとして、1年前にジェーンズが馬を使って問題の生じなかった道を採用したと考えるのが妥当であるように思う。以上を鑑みて、ジェーンズが踏んだルートは天皇巡幸の道だったと仮定し、2頁のジェーンズの妻ハリエットの書簡の内容及び下記の資料を合わせて、Fig. 3のように推察してみる。

縣廳よりは殊更らに長崎に瀛船を儀して以て、ヂェンス氏と共に之に乗じて、八月十五日百貫港に着す、藩公之に乗馬を賜ふ、氏乃ち之に乗じ、夫人は籠に乗ず、常備軍の二隊ヂェンス氏を熊本の南端石塘といへる處に迎ふヂェンス氏二隊の兵士に擁せられ、馬に跨り肅々として熊本に入り、古城の假館に着しぬ、…<sup>18</sup>

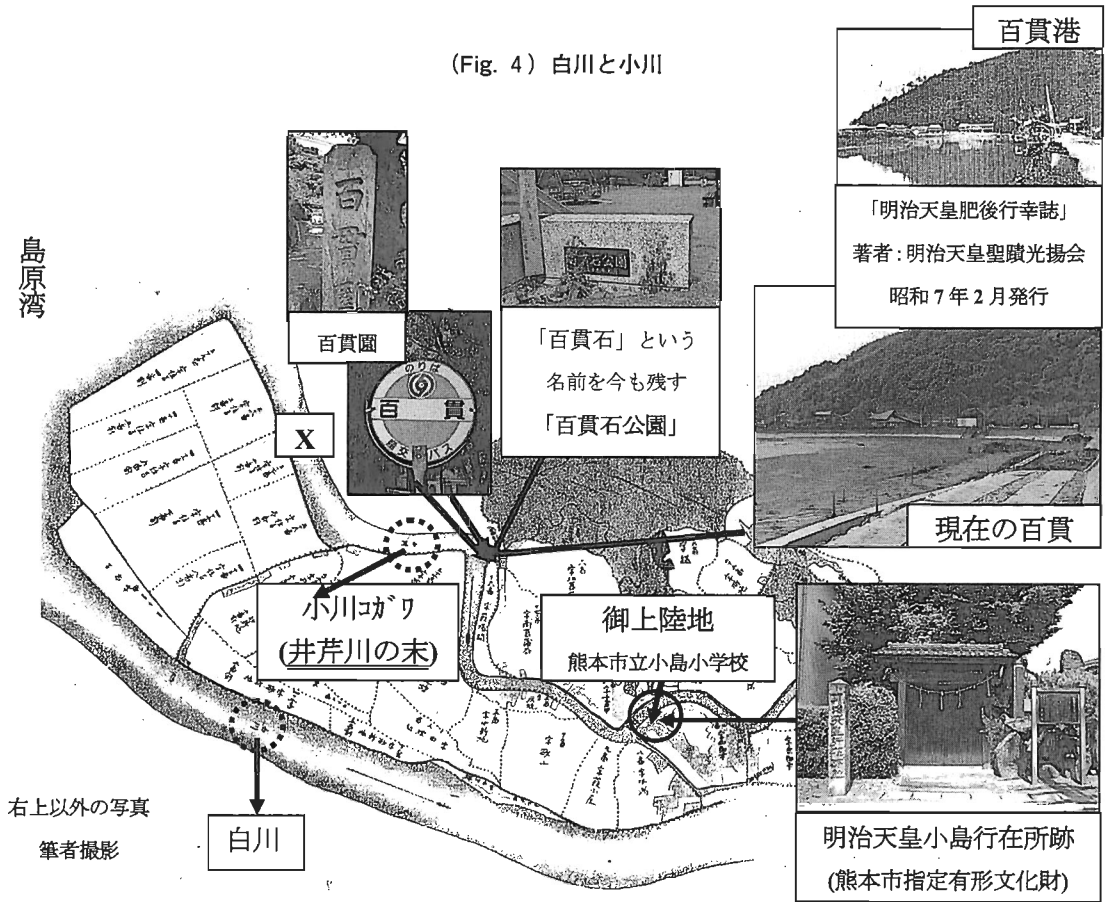
(Fig. 3) ジェーンズ一家の熊本到着から城下までの移動手段と経路



引用18によると、ジェーンズ一行は明治4年8月15日に百貫港に到着している。実際に地元の道歩いてみると、今はわずかに地名や营造物、石碑などに「百貫」や「百貫石」という名が残っているのが確認でき、『明治天皇肥後行幸誌』の「百貫港」と類似したアングルで、彼らが到着した「百貫」

と考えられるポイントを写すこともできた。百貫や上陸地が点在するのも、白川沿いではなく、X川沿いであり、白川からはかなりの距離がある。

明治初年のX川の呼称に関して調べた結果、X川はかつて「小川コガリ」と称され、高橋公民館が発行した『高梁史話』には、「小川（井芹川の末）」と記されていた。<sup>19</sup> 従って、現在、地図で坪井川となっているFig. 1の「X」は、以前は「坪井川」でなく、「井芹川」の末だと位置付けられていたことが分かった。つまり、次頁Fig. 5の通り、当時「井芹川」は、現・熊本県道22号熊本停車場線春日橋付近で白川と一旦合流し再び分流して島原湾に注ぐルート（次頁Fig. 5の◀●●●●）を流れていたことになる。



元地図・熊本県管轄肥後国 飽田郡下松尾村  
(現・熊本市松尾町、他) (一部を使用)  
【新熊本市史・別編 第1巻 絵図・地図】  
熊本県立図書館所蔵

Fig. 5の明治4年頃の井芹川と白川のルートは、明治44年に部分修正された地図をもとにして追ったため、多少のずれがあると思うが、ジェーンズ一行は白川沿いの土手でなく、井芹川の末と認識されていた川沿いの土手を(Fig. 5の●●●●)を辿ったと推察する。熊本に入国したばかりのジェーンズの妻ハリエットが井芹川イセリガワを「Serikawa セリカワ」と手紙に書いても不思議は

(Fig. 5) 想定できるジェーンズの足取り (——) と当時の井芹川の川筋 (●●●●)



元地図・熊本五万分之一地図（一部を使用）  
 (明治34年測図、同44年部分修正、大正10年出版)  
 熊本市歴史文書資料室提供

ない。これまでの研究で Serikawa は「白川」と捉えられていたが、実はそれは白川でなく「井芹川」であると考えられる。

### 3. 熊本洋学校の設立

本項では、熊本洋学校設立の経緯を述べるとともに、これまであまり論じられてこなかった設立地周辺の環境を明らかにして、同校の設立が投じた波紋について言及する。

ジェーンズと同じアメリカ国籍の歴史学者 F. G. ノートヘルファー氏 (1939-) は、明治初期の熊本について次のように分析している。

ジェーンズがやって来た1871年の後半、熊本では大混乱が起きていた。熊本はどの地域よりも保守的な傾向が強く、少しでも進歩的な知識を持つ者には危険な場所で、明治維新の早い時期になされるべき近代化が遅れていた。領内の改革派が、この地域の失われた威厳と影響力のいくつかでも取り戻せるような政策転換を始めることができたのは、内戦直後に、熊本には国を動かす力がないという切迫した苦悩があったからだ。<sup>20</sup>

雄藩に遅れをとっていた熊本でも、明治3 (1870) 年6月1日、細川護久侯 (1839-1893) が弟の護美公 (1842-1906) を大参事に据えて新政権を発足させた。護久侯も護美公も横井小楠 (1809-1869) の門弟で、藩政改革の折には実学党の人材を重用した。教育改革として、7月8日に藩校「時習館」と漢方医学校「再春館」、洋學所などを廃止し、10月6日にオランダ海軍医官セ・ヘ・ファン・マンスフェルトを招聘して蘭方医学の「古城醫學校」及び病院を、翌明治4年「古城堀端」にジェーンズを招聘して「熊本洋學校」を開設した。<sup>21</sup>そして、敷地高台の東南側に醫學校教師邸が、東北側に洋學校教師邸が併設された。これらの建物が設立されたのは、現・熊本県立第一高等学校敷地内であ

る。

熊本洋学校の設立場所については、『改訂 肥後藩國事史料』巻十に、「熊本古城の北隅に在りし三洲都築中根津川松井六家の邸地凡そ一万餘坪を買上げられ之を學校敷地に供せられ候二付」と詳しく記されている。<sup>22</sup> 家督を相続した護久侯が開明的施策の一つとして熊本洋学校を新設したのは、熊本城内の古城<sup>7</sup>と呼ばれる地域で、現在の熊本城が完成する前の藩主の居城—隈本城があった場所ということになる。ノートヘルファー氏の言う「どの地域よりも保守的な傾向が強く、少しでも進歩的な知識を持つ者には危険な場所」において外国人教師を護衛するうえで、細川家の旧居城に洋学校を設立したことは、藩知事護久にとって好都合だったと推察する。

一方、勤皇党の祖、林桜園ハシウエンの私塾「原道館」が城内千葉城にあり、また、尊王攘夷を高唱して極端な保守主義を貫いた神風連が後に決起した藤崎八幡宮も、当時現在地（熊本市川淵町）にはなく、「白川縣肥後國熊本全圖」（明治10年）によると、洋学校から約700m離れた城内—現・藤崎台県営野球場の地（熊本市宮内）にあった。熊本洋学校から保守勢力が集結する場所まで、さほど離れていない。第2級生徒つまり創立2年目入学者の海老名彈正が、日曜日の午後の遊び場所として、洋学校からおよそ3 km離れた花岡山（熊本市春日町）を挙げている<sup>23</sup> ところを見ると、さほど離れていないというより、むしろ極めて近いと言える。これまで侍の特区だった場所に、西洋科学文化を学ぶ洋学校が設立されたため、丁齧を結った攘夷主義者の怒りに触れただろうことも、否定できない状況だったと推察する。

#### 4. 熊本洋学校の教育

本項では、先行研究で知られていないように思われる日課について述べたあと、洋学校開校時の授業の様子を踏まえたうえで、研究者によって記述の異なるアルファベットの学習期間について言及する。

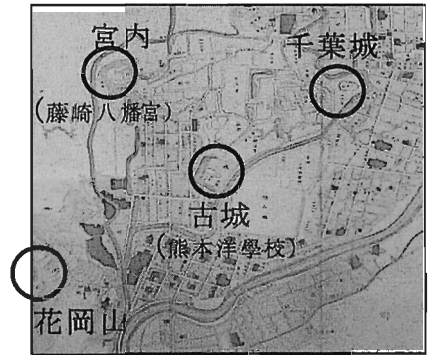
日課に関しては、熊本洋学校でサマータイム制が採られていたことを述べたい。

Lessons began at eight in summer term, and at nine in winter. In summer the school was closed at three; in winter, at four. ...<sup>24</sup>

海老名彈正も、「起床時間は5時か6時 [季節によって異なる] で、それを知らせる鐘の音で全員ベッドから飛び起きた。朝食の時刻を知らせる鐘は7時に鳴り、全員が整列した。…」<sup>25</sup> と伝えている。

日本では、戦後1948（昭和23）年、GHQの指令により「夏時刻法」が制定された。しかし、反対の声が多く、4年間続いた後に廃止された。<sup>26</sup> そもそも、サマータイムは、18世紀後半にベンジャミン・フランクリン（1706–1790）が提起した制度だと言われている<sup>27</sup> が、現在サマータイムを実施し

(Fig. 6) 古城、千葉城、宮内、花岡山



元地図：熊本全圖（一部を使用）  
（明治13年御届、明治14年出版）  
熊本県立図書館所蔵

ている欧米においても、20世紀になるまで実施はなかったとされている。<sup>28</sup>

開国直後の日本の学校にこのサマータイム制を導入することができたのは、まず、ジェーンズ自身が『クマモト』で述べているようにフランクリンの業績を高く評価していた<sup>29</sup> こと、そして、熊本洋学校第1級生徒、小崎弘道が「ジェーンズ大尉の仕事は、名目上、カリキュラムを決定し寮の監督者としての責任を担うことであったが、入学すると、彼が実質的に学校全体を動かしているのが分かった」<sup>30</sup> と回顧しているように、ジェーンズが学校運営の全権を担っていたことが、大きな要因として挙げられる。

次に、創立当初の授業の様子について言及する。将来、洋学校の生徒が250名から300名に増えることを見越して、広い寄宿舎や講義室、口頭演習室の建設が進む中で、洋学校の授業は仮校舎で始められた。すると今後の教授手段である英語の基礎修得をめぐる、生徒達の激しい競争が始まった。

洋学校での最初の課程は、アルファベットの習得だった。ジェーンズは、3日間のトライアルで、50から60人の秀才をざっと評価し、8人から10人の班に分けた。そして、「英語の基本を教え込むためにスペリング・ブックを使ったが、手元に1、2冊しかなかったため、注文した同書が届くまで、切望してやっと手に入れた黒板に英単語の発音の仕方を図解し」て教えたと述べている。当初から、班の最優秀者には、難しい発音のほかアルファベットの基本の厳しい反復練習が課せられたという。<sup>31</sup> これだけの記述しかないので明言できないが、恐らく、班の最優秀者が班内の同級生に指導できるようにと採られた措置であろう。優秀な上級生が下級生クラスを教授したことは周知されているが、ジェーンズは、初年に、各班の優秀者を鍛え、彼らが同級生を指導出来得るシステムを採っていた可能性が認められる。校舎が完成すると、生徒は大教室に向くことが義務付けられ、ジェーンズが班ごとに1時間ずつ直接指導する間、指導を受けない生徒達は自習した。<sup>32</sup>

このように始められたアルファベットの学習期間は、のちに出版された9冊の研究本によると、20日（1冊）、10日（5冊）、そして3、4日或いは3日（3冊）だとする3つのグループに分かれることを見出した。<sup>33</sup> 10日とするグループのうち、「洋学校の授業状態を、自分の級（海老名）に就いて云はう。…スペリング書は各生徒に與へられた。ジェーンズは、通譯なしに英語を教へ、口の開き方や、舌の上げ下げを教へる事、十日間に及んだ。」と記述する著作本、渡瀬常吉著『海老名弾正先生』は別として、その他の著述ではそれぞれ明記されている日数が洋学校全体の学習期間として伝わる可能性がある。

一方、『クマモト』には、「1893年にジェーンズの十数人の教え子達が寄稿し、*Captain Janes and His Work in Japan* がつくられた」と記されている。これは当事者である元生徒が関わっている著作で、信頼性の高い文献だと認識する。そして、この文献は、アルファベットの学習期間について以下のように説明している。

Captain Janes did not understand Japanese, and the boys English, some of them unable to tell the top from the bottom of an English book. One can imagine what difficulties he experienced in teaching the alphabet. But he overcame those by going so far as to illustrate by pictures the pronunciation of each letter. It took him twenty days to teach the alphabet to the first set of boys. The second set learned it in eight days, and the third in three days.<sup>34</sup>



*Captain Janes and His Work in Japan* が作成された年（明治廿六年一月三十日發兌）、上記を日本語訳にした著作「追懐録」「九州文學第參拾壹號附録」が九州文學社から、さらに、翌27年には、九州文學記者を著者として『日本ニ於ケル大尉ヂェンス氏』という和書が出版されている。これらの著作の中で、前著の5頁と後著の10頁には、それぞれ、「最初の入學生の如きアルファベットのみにて二十日を費やし第二年生には一周七日を以て之を授け、第三年生には三日を以て教授し終りしと云ふ」と記されている。『九州文學』（託麻郡・熊本英學校校友会雑誌）は、主にコミュニティで流布していた雑誌だと推察され、また、僅か19cmの小本『日本ニ於ケル大尉ヂェンス氏』に至っては、全国にどれだけ頒布されたか不明で、後年の研究者に届かなかつたのかもしれない。いずれにせよ、熊本洋学校でのアルファベットの学習期間については、「追懐録」及び『日本ニ於ケル大尉ヂェンス氏』の記述内容である「創立1年目に入学した生徒には20日、2年目の生徒には7日、3年目の生徒には3日でアルファベットを教えた」とすることが妥当だと考える。

## 5. 熊本洋学校の閉校

閉校の理由に関して、杉井六郎氏は「キリスト教社会問題研究」第4号39頁で「花岡山結盟以後実学党の人々の熱意が減退し学校維持資金も困難となった」と、また、松井康彦氏は「熊本洋学校とその周辺」69頁で「…上記の如き事件（花岡山事件）のため」と記す以外、閉校の理由を明言する先行文献が見当たらないようであるため、本項で言及する。

花岡山事件とは、明治9年1月30日、自主的にキリスト教を信仰するようになった熊本洋学校生徒有志35名が花岡山で「奉教趣意書」に署名して誓いをたてた事件である。ジェーンズは「英語普通學教師」<sup>35</sup>として招聘されており、授業ではキリスト教を教えなかつたのちに元生徒達が証言している<sup>36</sup>にも拘らず、花岡山の事件により、ジェーンズは洋学校で多くのクリスチャンを養成したと言われている。熊本洋学校第2級に入学し退学後第5級に再入学した<sup>37</sup>徳富蘇峰によると、横井小楠は明治2年1月に「耶蘇教を信じたといふ理由の下に暗殺され」<sup>38</sup>ており、それ以降、キリスト教は実学党にとって禁忌だったと考えられる。従って、実学党が創設したと言える熊本洋学校から、キリスト教を信仰する生徒が多数出たことで、関係者は大いに動揺し混乱したものと推察する。結盟者の中に小楠の嫡男・時雄までいた<sup>39</sup>となれば、なおさらのことだっただろう。

この理由以外に、明治6年5月30日、安岡良亮が中央から熊本に下り、県令（現在の県知事）に就任したことを挙げたい。安岡の就任後、実学党の役人達は県政から一掃されている。<sup>40</sup>これは、熊本洋学校創立から2年にも満たない時点で、洋学校が実質的にその政治的後見役を失っていたことを意味し、今まで洋学校閉校に繋がる理由として挙げられることのなかつた出来事のように思われる。県政から離れた実学党の人々は、竹崎茶堂らが結成した「耕耘社」に結集しジェーンズの協力を得て西洋式農法を試みたり、<sup>41</sup> 実業を興したりした<sup>42</sup>が、この件については論旨を離れるため言及することを控える。花岡山の事件後、熊本洋学校を支え或いは立て直す後ろ盾が再び現れることもなく、創立五年目の年度終了とともに、熊本洋学校は閉校されることになった。

## 6. おわりに

本稿は、断片的ないくつかの点を取り上げて論じ言及するという形をとった。

ジェーンズが入城したルートについては、先行研究の白川沿いの道ではなく、かつて井芹川の末と

認識されていた現在の坪井川沿いのルートが考えられると論じた。そして、熊本洋學校設立は、熊本の保守勢力の存在を、また、閉校に関しては、キリスト教を無視して言及することができず、異文化間の歩み寄りの難しさを浮き彫りにした。

「家を自分たちの住みやすいように整えた後は、日本語を学ぶことだけを考えてきた」<sup>41</sup> 当時の多くの伝道団体関係者と異なり、ジェーンズは、英語で英語を教えることにとどまらず、英語で各教科を教授する教育方針を貫いた。<sup>42</sup> 西洋文化を修得したい生徒にとって、英語による普通教育は理想的な教育環境である。そして、閉校までのわずか5年の間に、熊本洋學校は、創立当時の英学小学校<sup>43</sup> という位置づけから、中等教育<sup>44</sup>、さらに、高等教育<sup>45</sup> を行う学校へと、その格付けを次第に上げていった。このことだけをみても、ジェーンズがどれほど熊本の近代教育に貢献したかは明らかであろう。

しかし、西洋の日課を取り入れ、西洋の科学技術・文化の精髓を教授した熊本洋學校は、当時の混乱した状況の中で、熊本県民全てから支持を受けていたものではなかったのだろう。少なくとも「西洋器械の術を盡くす」<sup>46</sup> 主義に反する攘夷主義者にとって、洋學校は耐えがたく、怒りを生む対象だったに違いない。また、洋學校の閉校とともに、多くの才能ある若者たちが県外に流出したことは、極めて残念な結果だったと思われる。

最後に、本稿を作成するにあたり、郷土熊本でしか入手できない資料や文献を使わせていただき、関係者の方々にお礼を申し上げたい。

#### [注]

- 1 ユネスコ東アジア文化研究センター『資料 御雇外国人』、小学館、1975年、p. 286.
- 2 「学制（明治5年制定）下における教育財政：教育のための官金すなわち国庫支出金の費途は、小学扶助金のほか、外国人教師の俸給ならびに外国人に係る費用、大学校および中学校の営繕・書籍・器械費、生徒に費用を給貸するの費および留学生公選生の費に限定されていた。教育費のうち小学扶助金および授業料収入を除く残りはすべて学区が調達した。」（文部科学省ホームページ『学制百年史』第一編 近代教育制度の創始と拡充、第一章 近代教育制度の創始（明治五年～明治十八年）、第六節 教育行財政、三 教育財政  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpbz198101/hpbz198101\\_2\\_043.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz198101/hpbz198101_2_043.html)）  
つまり、学制公布以前は、政府と府県がそれぞれ外国人教師と雇用契約を行ったものと思われる。学制頒布後、文部省は外国人教師の俸給を差し止めることとなったが、熊本洋學校においては、細川護久侯が私財を充てることで高額な外国人教師人件費の確保ができ、学校を存続させることができた。  
/ 石井容子「L. L. Janes 大尉の熊本における足跡」『熊本県立大学大学院文学研究科論集』第2号、熊本県立大学大学院文学研究科、2009年、p. vi.
- 3 F. G. Notehelfer, *American Samurai: Captain L. L. Janes and Japan*, Princeton UP, 1985, pp.130-269.
- 4 京都同志社社史々領編集所、史料彙報第二集、1968年、pp.56-105、第三集、1969年、pp. 15-96、第四集、1970年、pp.1-110.
- 5 F. G. Notehelfer, *American Samurai: Captain L. L. Janes and Japan*. Princeton UP, 1985, p.108.
- 6 Capt. L. L. Janes, *KUMAMOTO, An Episode in Japan's Break from Feudalism*, 京都同志社社史々領編集所、史料彙報第二集、p.5.
- 7 九州文学社、「追懐録」『九州文學』第參拾壹號附録、1893年、p.3.

…八月初旬ヂェンス氏横濱に着し、直ちに上京築地ホテルに宿す、野々口（爲志）氏乃ちフル

ベッキ氏と與に同氏に而會し、直ちに定約を結び、三年の年限を定む、藩公一タチェンス氏を招きて饗應せらる、而して氏は日ならず東京を發して熊本に来る、…

- 築地ホテルは慶応3年、幕府の命により築地海軍操練所の跡地（現勝鬨橋北詰）に建設開始され、明治元年頃、開業した日本最初のホテルである。外国人からは「エドホテル」の別名で呼ばれていた。明治5年2月、延焼により焼失した。www3.ocn.ne.jp/~kyokyo/tsukiji.htm
- 8 the island of Pappenburg は、高鉦島は、キリスト教の殉教の島であることと、船が長崎港に入る目印の島として外国人に知られていた。（Nagasaki University Collection ID:3244）
- 9 Capt. L. L. Janes, *KUMAMOTO, An Episode in Japan's Break from Feudalism*, 京都同志社社史々領編集所、史料彙報第二集、pp.8-9.
- 10 *Ibid.*, p.11.
- 11 田中啓介、上田稷一、牛島盛光編訳、『ジェーンズ・熊本回想』改訂版、熊本日日新聞社、1991年、p.17.
- 12 Janes, *KUMAMOTO*, 史料彙報第二集、p.12.
- 13 高橋公民館『高梁史話』、高橋公民館、1957年、p.44.
- 14 「熊本 まちあるき」<http://www2.koutaro.name/machi/kumamoto.htm>
- 15 高橋公民館『高梁史話』、高橋公民館、1957年、p. 44.
- 16 宮内庁、『明治天皇紀 第二』、吉川弘文館、昭和44年、pp.712-713. 會輔堂は嘉悦など実学党の人達が設けた学会だった。
- 17 本稿第3項第3段落（p.6）参照。
- 18 九州文学社、『追懐録』『九州文學』第參拾壹號附録、1893年、pp.3-4.
- 19 高橋公民館『高梁史話』高橋公民館、1957年、p.45.
- 20 F. G. Notehelfer, 'The Kumamoto School for Western Learning,' "L. L. Janes In Japan: Carrier of American Culture and Christianity," *Journal of Presbyterian History* volume 54 - number 4 winter 1975, Presbyterian Historical Society, 1975, p.320.
- 21 熊本縣教育委員会『熊本縣教育史』上巻、臨川書店、1975年、p.301.
- 22 伊喜見謙吉『改訂 肥後藩國事史料』巻十、侯爵細川家編纂所、1932、p.874.
- 23 海老名彈正『熊本洋學校と熊本バンドと』（講演速記）1935年、p.14.
- 24 The Editor of the *Kyushu Bungaku*, Captain Janes and His Work in Japan, *Kyushu Bungaku*, 1893, p. 7.
- 25 F. G. Notehelfer, 'The Background of a Secular Missionary,' "L. L. Janes In Japan: Carrier of American Culture and Christianity," *Journal of Presbyterian History* volume 54 - number 4 winter 1975, Presbyterian Historical Society, 1975, p.328. / 渡瀬常吉『海老名彈正先生』龍吟社、1938年、p.78.
- 26 夏時刻法  
公布－昭和23年4月28日法律第29号（提出者：内閣、種別：閣法、提出番号：45）  
廃止－昭和27年4月11日法令第84号
- 27 [http://www.jmam.co.jp/column/column15/1189114\\_1758.html?JmT](http://www.jmam.co.jp/column/column15/1189114_1758.html?JmT) 3 日本能率協会マネジメントセンター
- 28 相賀徹夫『日本大百科全集』10、小学館、1986年、p.245.（索引先：サマータイム）
- 29 Janes, *KUMAMOTO*, 史料彙報第三集、pp.16, 17, 28, 48, 50, 51, 79. 第四集、p.82.
- 30 F. G. Notehelfer, 'Training in Christianity,' "L. L. Janes In Japan: Carrier of American Culture and Christianity," *Journal of Presbyterian History* volume 54 - number 4 winter 1975, Presbyterian Historical Society, 1975, p.328.
- 31 Janes, *KUMAMOTO*, 史料彙報第二集、p.44.

- 32 F. G. Notehelfer, 'Training in Christianity,' "L. L. Janes In Japan: Carrier of American Culture and Christianity," *Journal of Presbyterian History* volume 54 - number 4 winter 1975, Presbyterian Historical Society 1975, p.329.

- 33 ①①1926年、福田令寿『五十周年熊本班（バンド）追懐録』、p.12

…「ナンバー」を「何番」と解し、「スタンド、オン」を「下ん段」と誤るが如きは尚可なり。其の字母二十六字十日間を費やし、無味乾燥宛然砂を囃むが如き綴書を六ヶ月間も打續いて譜記せしが如き、今更其の根氣強きに驚かるゝなり。

- ②②1938年、渡瀬常吉『海老名彈正先生』龍吟社、p.79

洋学校の授業状態を、自分の級に就いて云はう。…スベルリング書は各生徒に與へられた。チェーンズは、通譯なしに英語を教へ、口の開き方や、舌の上げ下げを教へる事、十日間に及んだ。…發音がすむと、ウェブスターのスベルリングを教へたが、出来ない者は落第させられた。…

\*この部分について、引用の注なし。

- ③③1958年、昭和女子大学近代文学研究室・編集『近代文学研究叢書』10、p.112

…海老名彈正は次のように記している。…スベルリング書は各生徒に与へられた。チェーンズは通譯なしに英語を教へ、口の開き方や、舌の上げ下げを教へること、十日間に及んだ。發音が済むと、ウェブスターのスベルリングを教へたが出来ない者は落第させられた。…

\*「渡瀬常吉『海老名彈正先生』七九頁」からの引用した旨の表示あり。

- ④④1975年、Notehelfer, F. G., "L. L. Janes In Japan: Carrier of American Culture and Christianity," *Journal of Presbyterian History* volume 54 - number 4 winter 1975, Presbyterian Historical Society, p.329.

…通辭は解雇された。彼は、生徒一人一人にスベルリングブックを渡し、そのテキストの中に出てくる英単語を發音するためには、それぞれ舌をどう動かせばよいか教授した。生徒達は、10日の猶子の後、一連の試験を受けた。ある生徒は、これらの試験で「身は縮んだ」と、後年、回顧している。…

\*この部分についての注はないが、2パラグラフ前に、渡瀬常吉『海老名彈正先生』p.79の別の部分を引用している。ノートヘルファー氏は海老名彈正の研究者として有名である。

- ⑤⑤1984年、熊本県立第一高等学校・編『熊本古城史』pp.447-8

第二章 熊本洋学校とジェーンズ 第一節 熊本洋学校 花立 三郎

課程表を見ることができないが、海老名彈正の回顧談で、大体の学習順序を知ることができる。その授業状態は、一年の最初にスベルリング書が各生徒に与えられ、發音練習をすること10日間、それがすむとウェブスターのスベルリングである。これを午前一回、午後一回教えられた…

\*「渡瀬常吉『海老名彈正先生』七九-八二頁。」と注あり。

- ⑥⑥1997年、同志社大学人文科学研究所・編『熊本バンド研究 日本プロテスタンティズムの一流流と展開』復刻版 p.150

海老名彈正の後年緒回顧によると、洋学校の授業状態について、「口の開き方や、舌の上げ下げを教える事、十日間に及んだ。…

\*「渡瀬常吉『海老名彈正先生』七九-八二頁。」と注あり。

- ③⑦⑦1893年、『九州文學第參拾壹號附録』九州文學社（熊本縣託麻郡熊本英学校内）p.36

「教育の事に關して」 下村孝太郎氏談話

洋学校に於て第一に学びし書はウェブスターの「スベルリング、ブック」なりき、余始て先生に就て此書を學ぶ、最初の日 a、b、c、d、e、f、の六字を學び三四日にして之を卒へ、次に ba = ベー、

be = ビー、bi = バイの章に移れり、余は先生の教の儘に b - a - ベーと唱ふる事は爲せとも、何故に b と a とを合すればベーと云ふ音を發するかを知らず、唯だむやみに勉強して之を暗記したり、…

⑧1985年、田中啓介・他共著『熊本英学史』本邦書籍 p.98

…ジェーンズは此のテキスト（=ウェブスターのスプリング・ブック）によって ABC の発音から教えた。当時の教え子のひとり下村孝太郎は、次のように回想している。

洋学校に於いて第一に学びし書はウェブスターの「スプリング・ブック」なりき。余始て先生に就て此書を学ぶ。最初の日 a、b、c、d、e、f、の六字を学び、三四日にして之を卒へ、次に ba = ベー、be = ビー、bi = バイの章に移れり。…

\* 記述の通り、アルファベットの学習期間は、下村孝太郎回想録より引用。

⑨1991年、福田昇八『語学開国』大修館書店 p.9

最初の日、ジェーンズは、ABCDEF の六文字の大文字小文字を教えた。こうして 四日間 でアルファベットを終えた。次には本課に入り、どのつづり字は同発音するかの訓練を始めた。…生徒は b と a が一所になるとなぜ「ベイ」と読むのか分からぬままに、ただ先生の口まねをする。…

\* この部分について、引用の注なし。

- 34 The Editor of the Kyushu Bungaku, *Captain Janes and His Work in Japan*, Kyushu Bungaku, 1893, pp.8-9.
- 35 宇野東風『我観 熊本教育の変遷』第一書房、1983年、p.56.
- 36 松井康秀『熊本洋学校とその周辺』浩文社、1967年、p.34. / Fuwa, Tadajiro. "My Reminiscences of Capt. Janes." (原稿複写) / 海老名弾正『熊本洋学校と熊本バンドと』熊本偕行社、1935年、p.12.
- 37 徳富猪一郎『蘇峰自伝』中央公論社、1935年、pp.52-53, p.60. / 潮谷総一郎『熊本洋学校とジェーンズ 熊本バンドの人びと』熊本年鑑社、1991年、p.86.
- 38 徳富猪一郎『蘇峰自伝』中央公論社、1935年、p.65.
- 39 横井時雄（当時、伊勢時雄）は「奉教趣意書」において署名者35名中29番目に署名している。
- 40 徳富猪一郎『蘇峰自伝』中央公論社、1935年、p.59. / 犬飼信義・編『改訂・近代熊本農業年表 明治篇』共同体社、1976年、p.19.
- 41 犬飼信義・編『改訂・近代熊本農業年表 明治篇』共同体社、1976年、p.19. / 石井容子「L. L. Janes 大尉の熊本における足跡」『熊本県立大学大学院文学研究科論集』第2号、2009年、pp. xv-xx.
- 42 花立三郎「横井小楠の業績と思想」『近代熊本の思想と文化』熊本大学、1982年、pp.18-19.
- 43 Janes, KUMAMOTO, 史料彙報第四集、p.76.
- 44 *Ibid.*, 史料彙報第二集、pp.26-34.
- 45 伊喜見謙吉『改訂 肥後藩國事史料』卷十、侯爵細川家編纂所、1932年、p. 692, p.878.
- 46 熊本縣教育委員会『熊本縣教育史』上巻、臨川書店、1975年、p.301. 『熊本縣教育史』によると、熊本洋学校は、明治初年から明治5年学制頒布までの第一期で、「教養ノ主ナル教科」として「英語」を教授した中等教育に区分されている。
- 47 熊本縣教育委員会『熊本縣教育史』上巻、臨川書店、1975年、p.521. 『熊本縣教育史』によると、熊本洋学校は、明治5年学制頒布から同12年教育令發布までの第二期で、古城醫學校とともに高等教育に区分されている。
- 48 花立三郎「幕末アメリカに留学した肥後藩士」『肥後黎明期の人びと』熊本大学、1984年、p.32.

## 【参考文献】

- Janes, L. L., *KUMAMOTO, An Episode in Japan's Break from Feudalism* (京都同志社社史々料編集所)  
 Notehelfer, F. G. *American Samurai: Captain L. L. Janes and Japan* : Princeton UP, 1985.  
 Notehelfer F. G.. "L. L. Janes In Japan: Carrier of American Culture and Christianity" *Journal of Presbyterian History* volume 54 - number 4 winter 1975 : Presbyterian Historical Society, 1975.  
 The Editor of the Kyushu Bungaku, *Captain Janes and His Work in Japan* : Kyushu Bungaku, 1893.  
 伊喜見謙吉【改訂 肥後藩國事史料】卷十 (侯爵細川家編纂所、1932)  
 九州文学社『九州文學』第參拾壹號附録 (九州文学社、1893)  
 宮内庁『明治天皇紀 第二』(吉川弘文館、1969)  
 熊本縣教育委員会『熊本縣教育史』上卷 (臨川書店、1975)  
 熊本県立第一高等学校・編『隈本古城史』(熊本県立第一高等学校、1984)  
 熊本市『新熊本市史』通史編、資料編、別編 (熊本市、1998-2003)  
 高橋公民館『高梁史話』(高橋公民館、1957)  
 田中啓介、上田穰一、牛島盛光編訳『ジェーンズ・熊本回想』改訂版、(熊本日日新聞社、1991)  
 田中啓介・他共著『熊本英学史』(本邦書籍、1985)  
 徳富猪一郎『蘇峰自伝』(中央公論社、1935)  
 花立三郎「幕末アメリカに留学した肥後藩士」『肥後黎明期の人びと』(熊本大学、1984)  
 花立三郎「横井小楠の業績と思想」『近代熊本の思想と文化』(熊本大学、1982)  
 福田令寿『五十周年熊本班 (バンド) 追懐録』(福田令寿、1926)  
 明治天皇聖蹟光揚会『天皇行幸記念碑文』(1931)  
 明治天皇聖蹟光揚会『明治天皇肥後行幸誌』(明治天皇聖蹟光揚会、1932)  
 ユネスコ東アジア文化研究センター『資料 御雇外国人』(小学館、1975)  
 渡瀬常吉『海老名彈正先生』(龍吟社、1938)

## Capt. L. L. Janes and the Kumamoto Yo-Gakko: Reviews on Janes' Arrival Route to the Teacher's House and the Kumamoto Yo-Gakko

ISHII Masako

Between 1871 and 1876, Capt. L. L. Janes instructed the selected boys and girls in Western culture and science without any interpreters at the Kumamoto Yo-Gakko. Depending on the materials left in Kumamoto, I drew a possible conclusion that the Janes' route to the teacher's house in Furushiro ran along the river bank of the present Tsuboi River, instead of the Shirakawa River, as has been believed so far. Besides, this paper attempts to discuss the background of the establishment of the Yo-Gakko and its controversy first, the education including the school schedules, the first operation at the school and the study days for learning the alphabet next, and finally the reason for the closure of the school. This study leads us to a view that the duration of the Kumamoto Yo-Gakko was strongly influenced by the political power and the social situation in those days.